

# 地域子育て拠点における多世代・多様な人々とのかかわりの意義 —インクルーシブなひろばづくりを通して—

宇田川 久美子\*

**The importance of diversity and inter-generational interaction  
as a means of enriching the environment for child rearing in our society:  
A case study of an inclusive regional childcare center**

**Kumiko UDAGAWA\***

## 【要旨】

本論文の目的は、地域における子育て力向上を実現するための地域コミュニティをいかにつくることができるかを究明するものである。そこで地域子育て支援拠点事業に指定されている「ひろば」の実際の活動を分析した。その結果、対象の地域コミュニティにおいて仲間内の同質性を根拠として結びつく「安心」の関係ではなく、一人ひとりの「違い」を「ありのままの自分」として受け止める「信頼」の関係が構築され、「信頼」の関係により形成されたコミュニティにおいて多様な人々とのかかわりの中で一人ひとりの「違い」が「その人らしさ」として生かされるインクルーシブなひろばが創造されていることが明らかとなった。インクルーシブなひろばにおいてメンバーの誰もが子育て支援に貢献することが可能となることから、地域における子育て力の向上を実現する地域コミュニティを創造するために「信頼」の関係を構築することが重要であることが明らかとなった。

キーワード：地域子育て拠点，多世代・多様な人々，インクルーシブなひろば，信頼の関係

## 1. 問題の所在と目的

1990年，合計特殊出生率が過去最低記録の1.58を下回り，いわゆる「1.57ショック」が起こった。それ以降，国では少子化対策として，様々なプランや法律をつくり，各種施策を実施している。しかし，少子化の進行傾向は依然としてとどまるところを知らず，そのような状況の中，次世代育成支援が推進されることとなった。2005年より「次世代育成支援対策推進法」が施行され，少子化対策とともに，家庭や地域を取り巻く環境の変化にも配慮した上で，これからの社会を担う子どもが健やかに生まれ，育つ社会をつくること目指されている。つまり，

子どもが育つこと，子どもを育てることを社会の中に位置づけ，地域における子育て力の向上が目指されることとなったのである。その次世代育成支援の一環として，現在，地域子育て支援拠点事業が全国で展開されている。地域における子育ての孤立化を防ぎ，かつ，子育て家庭における子育ての不安感や負担感を解消することを目的とした事業である。これは，児童福祉法に基づく児童福祉のための事業であり，かつ，子育て中の親支援の意味をもつ子育て支援事業でもある。具体的には，市町村により，以下の4つの基本事業—①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進，②子育て等に関する相談・援助の

\* うだがわ くみこ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科

実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て、及び子育て支援に関する講習等の実施—が「ひろば型」、「センター型」、「児童館型」の3つの形態において実施されている。つまり、これらの活動を通して、子育て親子を支援することが可能となる地域社会(コミュニティ)づくりを目指しているのである。そのため、市町村は地域子育て支援拠点事業の実施主体を社会福祉法人、NPO法人、民間事業者などに委託することができるとし、地域における子育て支援の裾野を広げようとしているといえる。しかし、この事業の従事者は「ひろば型」、「センター型」、「児童館型」の各々の型ごとに設定されている条件を満たすことが定められている上に、実際の活動の質を子育て支援の専門性、当事者性を活かして向上させていくよう求められている。このように従事者に対して、子育て支援の専門化を期待し、支援者としての質の向上を求めれば求めるほど、支援する側と支援される側の区分は明確となり、支援する側は限定されることとなる。その結果、子育て支援の裾野を広げていくことは難しくなると考えられる。少子化傾向が進行する状況下において、子育て支援の質を保障しつつ、支援する側を拡大していくことで、いかにして地域における子育て力を向上していくことができるかということは、現代社会における重要な課題であるといえる。そこで、本論文では、地域子育て支援拠点の中でも、従来のスタイルとは異なる特徴をもつ「ひろば」の実際の活動を分析することを通して、地域における子育て力の向上を実現することができる地域コミュニティの創造について究明することを目的とする。

## 2. 研究の方法

**【対象】** 筆者が参与観察を続けているNひろばを研究対象とする。Nひろばは、隣接するS(日本基督教団T教会が地域の幼児教育のために1953年に開園した幼稚園)の「S幼稚園将来構想委員会」(2005年7月発足)において、子育てしやすい環境づくりを検討する中で2007年6月に誕生した「ひろば」である。2011年10月には市の地域子育て支援拠点事業の「ひろば型」に指定されている。一般的な地域子育て支援拠点と比較し、①S幼稚園から生まれ、S幼稚園との連携がある、②「多世代・多様な人々の居場所づくり」というコンセプトをもつという特徴がある。第一の特徴であるS幼稚園との連携によって、活動の場としてS幼稚園の施設を活

用したり、在園児、卒園児の母親がNひろばの活動に利用者として、あるいは、支援者として参加するなど、人的な交流もある。さらに、利用者として参加しながらも、状況に応じて、ごく自然に支援者の役割を担う場面も見受けられる。以上のことより、子育て中の母親が支援者として参加していること、支援者—利用者の役割交替が起こることから、Nひろばの活動は子育て中の母親の実態に即した、当事者性が活かされている活動になっていると考えることができる。第二の特徴である「多世代・多様な人々の居場所づくり」というコンセプトをもつことで、Nひろばには、実に多様な人々が集う。通常、「ひろば」は、利用者である「子育て親子」と支援者である「スタッフ」で構成されることが多い。しかし、Nひろばでは、利用者の8割は就学前の親子であるが、残りの2割は小学生、若者、お年寄りなどで占められている。しかも、利用者—支援者の明確な区別がない。例えば、Nひろばに来ている不登校の中学生は、利用者である母親に頼まれて赤ちゃんの世話をしていたり、利用者である父親やボランティアの大学生に中学校の勉強を教えてもらったりしている。つまり、その都度、支援する側・される側の立場が入れ替わっているのだ。それはNひろばに集う全ての人に共通にあてはまる。だからこそ、はじめてNひろばを訪れると、親と子どもの組み合わせや支援者と利用者が区別できないということも多々、生じている。したがって、Nひろばに集う人々は「利用者」というより、「参加者」と表現した方が適切である。以上のことから、Nひろばは子育て中の母親の実態に即した当事者性が生かされた場であり、かつ多様な人々が集うことでそこに集う誰もが支援者になりうる場であると考えられる。

**【期間】** 筆者が参与観察をはじめた2010年4月より2017年10月までとする

**【方法】** 上記期間において、筆者が年に4~6回程度、実施している参与観察により得られた活動事例、及び、Nひろばに業務委託している活動レポートの作成、報告により得られた活動事例の中でも、特にNひろばの活動として特徴的である事例に焦点をあて、考察を進める。

## 3. 事例と考察

### (1) 「違い」を抱えながら「共に生きる」

Nひろばでは、どのような実践が展開されているのであろうか。さらに、展開されている実践は、そ

ここに集う多様な人々にとってどのような意味をもつのであろうか。

※以下のエピソード1はAさん（当時Nひろば事務局リーダー&ひろばスタッフ）が作成したレポートを筆者が抜粋し、訂正を加えたものである。また、Aさんがその場に居ることを感じたこと、考えたことについては〔 〕を付した。

#### エピソード1：多様な子ども同士がかかわる (20××年9月)

園児たちが「氷オニ」をやっているところを見て、Kくん（2歳）とHくん（2歳）もいつの間にか、その輪の中に混じっていた。園児たちはKくんとHくんにはタッチしていない。けれども、KくんとHくんは園児の真似をして氷になってピッと立ち、自分たちも参加している気持ちになっているようであった。[そこには「入れて」「いいよ」というやりとりもなく、きっちりと仲間入りして遊んでいるわけではないが、KくんとHくんにとっては、その場において時間を共有しているだけで園児たちと「一緒に遊んでいる」という思いを抱くことができるのではないだろうか。これはもしかすると、同じ年齢の子ども同士のかかわりだけでは生まれにくいことなのかもしれない。自分よりも年長の子どもが遊んでいる様子を間近で見ていることで「自分もやってみたい」という思いが自然に湧き起こり、このような遊びへの参加の形も生まれているのだと思う。]

また、園児たちは、オニごっこをするとき、一人の子どもが手にトンボを持っていると、「トンボをもってたらできないから離してから来て」と言ったり、(中略)「やりたい」と言った子どもがそろそろまで、何回もジャンケンをして待っていてあげたりしていた。[誰が参加するのか、どのように遊びを進めていくのかなど、「オニごっこ」が始まる前から、子どもたちは自分たちでいろいろなことを考えているのだなあと思った。]

そして、「オニごっこ」が始まってからも、あまりにもすぐに何回もつかまってしまう子どもには、自らオニになることを勧めてみたり、オニが特定の一人の子どものことばかりを狙うときには「ひとりだけじゃなくて他の人もつかまえて」という意見が出たり、自分がかまらそうになると「タイム！」と言って、つかまる

ことを阻止しようとする子どもには、「タイムばかりでずるい」という意見も出たりする。すると、そのような指摘を受けた子どもは「じゃあ、タイムは五回までね」と譲歩したりする。

[遊びの中で、ルールは流動的に改訂されたり新たなものが追加されたり、役割が生まれたりして、自然にこのようなコミュニケーションが成立することが不思議だと思う。「オニごっこ」という遊び自体のおもしろさもあるが、子どもたちは遊びの過程で生じるこのようなコミュニケーションも楽しんでいるのではないだろうか。(中略)子どもたちは、子ども同士のコミュニケーションの「やりとり」を楽しみながら、その「やりとり」の中で、自分たちなりにいろいろと考えたり、工夫したりしている。そう思うと、子ども同士の「やりとり」には大切な意味があり、「やりとり」の中で起こるケンカやトラブルも必要なものなのだろうと思う。]

【考察】年齢の低い子どもでも、仲間入りの手続きをとってなくても、ルールを理解していなくても、真似をして同じようなことをしてみるという自分なりの参加の仕方「共にする」ことを求め、楽しんでいるといえる。

また、「オニごっこ」に参加している子どもたち一人ひとりには、遊びが進行する過程で様々な思いを抱き、それを出し合っている。そして、その一人ひとりの思いは、簡単に切り捨てられたり、排除されたりしていない。互いに互いの思いを考慮しながら、「オニごっこ」を「共にする」ことを求め、「共にすること」を持続するために、その都度、その都度、様々な配慮し、工夫しているのである。これより、子どもたちは多様な思いを抱く一個の主体として遊びに参加し、その多様な各々の思いを違いとして排除することなく、考慮することで、「違い」を抱えながら「共に生きる」ことを実現していると考えられる。

#### (2) 「違い」が「その子らしさ」として生かされる

それでは、なぜ、Nひろばでは、参加者が抱く多様な思いの違いとして排除することなく、逆に、尊重した上で、「共にする」ということを求め、持続しようとするのであろうか。そのベースには「人間の尊さを共に生きる」というS幼稚園の教育理念があると考えられる。S幼稚園に通う園児とその保護者は、S幼稚園での生活を通して互いに尊重し合いながら共に生きるという経験を積み重ね、それが

Nひろばでの活動にも反映されているのである。以下のエピソードはS幼稚園の保育の中の一コマである。S幼稚園のクラス編成は異年齢で構成されており、3, 4, 5歳児が同じクラスのメンバーとして共に幼稚園生活を送っている。

**エピソード2：子どものありのままの存在を認める (20××年4月)**

入園したばかりの年少女児Sちゃんは、いままでクラスの集まりの際、寂しくなってしまう担任保育者の隣に座っていた。ところが、昨日の散歩のときにSちゃんは年長男児Tくんと手を繋いだことで今日の集まりではTくんの隣に座って集まりに参加することができた。担任保育者はそのことを子どもたちに伝える中で「みんなも寂しくなったらいつでも私の隣に来てもいいからね。年長さんでも年少さんのために我慢しなければいけないかなと思って我慢しなくてもいいんだよ。私のお膝の上でもいいよ」と話していた。その後、Sちゃんは幼稚園生活の中で新しく経験することにもTくんが傍らに居てくれることで挑戦することができ、幼稚園生活にも慣れていった。

【考察】保育者の子どもへのかかわりから、S幼稚園の保育実践は、「年長の子どものみだから年少の子どものお世話をしなければいけない」というように年齢によって「できなければならないこと」を設定し、その達成を目指しているのではないと考えられる。つまり、〇歳児としてではなく、〇〇ちゃんとして、子ども一人ひとりのありのままの姿を理解し、それに応じて保育をしているのである。また、Tくんは障害<sup>注1)</sup>のある子どもであるが、「できる・できない」に焦点化した保育実践ではないため、障害が浮き彫りにされていない。障害のある子どもの保育において、「できる・できない」に焦点化した保育が行われると、障害のある子どもはできないことが多く、年齢相応の発達に遅れがあるとみなされ、幼稚園生活の中で「お世話される」存在になりやすい。しかし、エピソード2では、Tくんのありのままの存在自体がSちゃんの支えになっていることから、Tくんは幼稚園生活の中で単に「お世話される」存在ではないといえる。TくんはSちゃんとのかかわりを通してTくんらしく、生き生きと幼稚園生活を送ることが可能となっており、互いが互いの育ちに貢献していると考えられる。これより、一人ひとりの子どものありのままの姿が「違い」とし

て排除されたり、「遅れ」として発達促進を目指されたりすることなく、「その子らしさ」が尊重され、生かされているといえる。その結果、「年齢の高い・低い」、「障害のある・なし」にかかわらず一個の主体として幼稚園生活に参加することが可能となり、一個の主体同士のかかわりが生まれている。その一個の主体としてのかかわりを通して、互いの育ちに影響を与え合う存在になっているのである。

**エピソード3：みんなでやりたい「オニごっこ」 (20××年9月)**

午前中に激しく降っていた雨が止み、昼食後、子どもたちは園庭に出て遊びはじめる。その中で、5, 6人の男児が「バナナオニ」(オニにタッチされるとバナナになり、その場から動くことができなくなるが、仲間にタッチしてもらうと、また、動けるようになり逃げることができる)をして遊んでいる。「バナナオニ」をして遊んでいるが、なぜか、積み重ねてあるマットの上に逃げ込むと、オニは捕まえることができなくなったり、オニに捕まりそうになった子どもが動きを止めて「バリア」と叫び、両手を胸の前でクロスすると、オニは捕まえることができなくなったり、遊びながら、新たなルールができあがっていく。そればかりではなく、オニにタッチされると、バナナにならずに友だちを追いかけはじめる子どももいる。参加している子どもたちが各々、好きなように遊んでいて、まとまりがないようにも見えるが、暗黙のうちに新たなルールは共通に理解されているし、自分なりのルールで参加していても咎められることはなく、参加している子どもたち全員が「バナナオニ」を楽しんでいる。

しばらくすると、一人の男児が園庭にしゃがみ込み泣きはじめた。すると、途端にバナナオニをしているメンバーが全員、その男児の周りに集まってくる。そして、しばらく、その男児を取り囲み、理由を聞いたり、慰めたり、励ましたりしている様子であったが、一向にその男児は立ち上がらなかった。その傍らに保育者がいるが、男児たちの様子を視界の端にいれながらも、直接にはかかわらない。やがて、周りを取り囲んでいた男児たちが立ち上がり、誰かが「じゃあ、〇〇くんはおやすみってことで」と言い、皆がバナナオニに戻っていく。すると、その男児も立ち上がったかと思うと、数秒もし

ないうちに「おやすみ、終わり」と自分で自分の気持ちに区切りをつけるかのように言って、皆の輪の中に戻っていく。

皆がオニにタッチされ、バナナになり動けないでいる友だちをタッチして助けようとしている中、Hくん(5歳)は、ルールがあまり理解できていないようで、オニに追いかけられると逃げるのだが、バナナになった友だちを助けるためにタッチしようとはしない。その代りに、自分が持っているナナカマドの実を枝から一粒ずつ取っては「爆弾、爆弾」と言って、オニとタッチされてしまった友だちの方をめがけて投げている。明らかに、他の子どもたちとは違う動きをしているにもかかわらず、そのようなHくんに対して、他の子どもたちは制止したり、否定したりすることはなく、また、Hくんも楽しそうに参加している。

【考察】参加している子どもたち一人ひとりが各々のルールで参加しているが、一人ひとりの異なるルールは排除されることなく、ルールとして共有されたり、その子どもなりの参加の仕方として認められたりしている。つまり、一人ひとりの子どもの思いは排除されることなく、尊重されながら遊びが成立しているのである。また、途中で遊びが中断しても、何とか遊びを持続しようとして、子どもたちなりに工夫したり、配慮したりしている。さらに、遊びのルールがわからなかったとしても、「わからないから参加することを諦める」のではなく、友だちと遊びを「共にする」ために、自分なりのやり方で工夫して参加し、楽しんでいる。これより、一人ひとりの子どものありのままの姿が「違い」として排除されることなく、「その子らしさ」として尊重され、その違いを抱えながらも「共にする」ことを求めているといえる。そして、「共にする」ことを実現していく過程に子ども同士の育ち合いが生まれているといえる。

以上、エピソード2、及び、エピソード3より、「人間の尊さを共に生きる」というS幼稚園の教育理念は、実際の保育に体现されているといえる。子ども一人ひとりの「違い」は「その子らしさ」として尊重され、「その子らしさ」を生かしつつ「共に生きる」ことを実現しているからである。つまり、S幼稚園の保育実践もNひろばのひろば実践も、一人ひとりの「違い」を人間の尊さとして「共に生きる」実践であるといえる。

### (3) 「ありのままの自分」で居ることが保障されるということに対する信頼

以上でみてきたように、Nひろばの活動においては、一人ひとりの「違い」が排除されることがないことから、多様な人々がかかわり、違いを出し合う過程で、自ずとトラブルも発生する。Nひろばではこのようなトラブルをどのように理解し、対応しているのであろうか。

※以下のエピソード4はAさん(当時Nひろば事務局リーダー&ひろばスタッフ)が作成したレポートを筆者が抜粋し、訂正を加えたものである。また、Aさんがその場に居ることを感じたこと、考えたことについては[ ]を付した。

#### エピソード4：多様な子ども同士がかかわることによって生まれるトラブル(20××年10月)

今日のひろばでは、3歳前後の子ども同士のモノの取り合いがいくつかあった。取り合いになると、一方の子どもがそのモノを持っていき、もう一方の子どもはそのモノを手に入れることができずに泣いてしまうことが多い。しかし、そこで周囲にいる大人が「欲しかったね」、「使いたかったね」などと、泣いてしまった子どもの思いに共感することで、泣いて気持ちを発散した後、他のおもちゃでも満足することができたり、おもちゃを持っていった子どもがそのおもちゃを使い終わるまで待たたりすることもできる。そして、子どもたちは、たとえケンカをしたとしても、自分の気持ちを切り替えて、ケンカした相手とも他のことをして一緒に遊ぶこともできる。[このように、自分で自分の気持ちを切り替えるためには、「欲しかった」、「使いたかった」という思いを十分に表に出して、周囲の人に聞いてもらうことが大切なのではないだろうか。周囲の人に聞いてもらうことで、子どもは自分自身を認められたという安心感を持つことができるし、その安心感が支えとなって、満足して他の遊びに移っていきけるのだと思う。]

そして、一人の子どもが持っていたぬいぐるみをもう一人の子どもが欲しくて泣いたとき、その場面を見ていたRくん(年中)が「使いたかったのかもね」と言った場面もあった。[このように子どもが自然に他の子どもの思いに寄り添うことができるのは、日常生活の中で、周囲の大人やS幼稚園の保育者が子どもの思

いに寄り添って共感している姿を目にしているからだと思う。]

また、子ども同士のトラブルに遭遇した際、モノを取ってしまう子どもの母親にとっては複雑な思いが生じるものである。もうすぐ3歳になるAくんの母親は「今日はAが取ってばかりで……。もう(私が)つらいから帰りたいわ」と冗談のように言っていた。[Aくんの成長の過程において、いまはモノの取り合いが生じる時期であると理解していても、実際にその場面に出会うのは親として、とてもつらいことだと思う。しかし、Aくんの母親が「つらい」という気持ちをその場を共にしている誰かに打ち明けられることや、泣いてしまったAくんを抱きしめながら、Aくんの「取っちゃう気持ち」をわかってあげようとすることや、母親自身がつらいと思いつつもたくさんの子どもの中で遊ばせてあげたいと思ってNひろばに来てくれること、その一つ一つが本当にありがたいことだと思う。]

【考察】Nひろばでは、子ども同士のケンカやトラブルは多様な人々のかかわりとして意義のあるものと理解され、多様な人々のまなざしの中で見守られている。そして、ケンカやトラブルなどで子どもの中に生じた葛藤を子ども自身が自分なりに乗り越えていくために、多様な人々のまなざしの中の共感が重要な役割を果たしていると考えられる。

それでは、なぜ、Nひろばでは、子ども同士のケンカやトラブルが多様な人々のかかわりとして意義のあるものと理解され、多様な人々のまなざしの中で見守られることが可能となるのであろうか。参加者の母親にとって、わが子がトラブルを起こす原因となって、トラブルを起こしている場面に遭遇することは、つらいものであると考えられる。20××年11月のAさんのレポートによると、Nひろばの常連であるJくん(3歳)は仲良しのTくんと些細なことでケンカをし、ケンカになるとすぐに手が出てしまうことがよくあるという。一方、Jくんの母親は「ひろば」に参加しているときはいつでも、他の子どもをよく見ているために、Jくんがケンカをしたり、相手を叩いたりしたときには、その近くにいる大人が話を聞き、必要があればJくんの母親を呼ぶなどして、対応してくれているそうである。Aさんは、Nひろばで抱くJくんの母親の思いについて、Aさん自身の子育てを通して経験してきた

様々な思いを軸に気付き、理解していく。それは、本当はJくんの母親はJくんがケンカをしたり、ケンカ相手の子どもに手を出したりしてしまうことは嫌なことだろうし、それを事前に防ぎたいとも思っているだろうし、防ぐためにJくんだけをずっと見ていたいと思っているだろう。けれども、敢えてそうすることはせずに、他の子どもたちを見てくれるのは、Jくんの母親にはNひろばに対する「信頼」があるからではないかというのである。Nひろばは安心してケンカができ、そうしたトラブルを通して共に育ち合う場であり、「ひろば」に集う全ての子どもたちの育ちを「ひろば」に集う全ての人たちで見守り、支えているという場であることに対する「信頼」があるからこそ、その「信頼」をベースとして、Jくんの母親は、Jくんばかりをずっと見ているのではなく、他の子どもたちを見ながら、多世代・多様な居場所を創る一員としてひろばに居てくれるのではないかということに気付いたそうである。要するに、Aさんが辿りついたJくんの母親に対する理解におけるNひろばに対する「信頼」とは、自分の子どもがトラブルを起こしているという理由で排除されない、母親がわが子のトラブルを未然に防いだり制止したりしないという理由で排除されないということに対する信頼であり、それは「ありのままの自分」で居ることが保障されるということに対する信頼であるといえる。

#### 4. 総合考察

それでは、なぜNひろばに参加する人々の間で「ありのままの自分」で居ることが保障されるということに対する信頼が生まれるのであろうか。山岸(1998)は、いわゆる一般に考えられている信頼というものを、二つの側面から「安心」と、「安心」とは区別した「信頼」とに分け、その違いを明確に示すことで、日本社会における集団には「安心」の関係によって形成されたコミュニティが多いことを指摘している。つまり、相手が自分のことを裏切られるかもしれないという社会的不確実性の存在する状況で、相手の人間性から評価することによって結ばれる関係を「信頼」の関係とし、相手が決して自分を搾取するようなことをしないだろうと確信できる場合に結ばれる関係を「安心」の関係としている。そして「安心」の関係によって結ばれたコミュニティにおいては、社会的な不確実性の大きな社会的環境におかれた人たちが関係内部において仲間内であるこ

とを根拠に結びつくことで社会的不確実性を低めるため、同質性が求められ、外部からの侵入を排除する閉じられた関係となることを示し、これを「やくざ型コミットメント」と呼ぶ。一方、「信頼」の関係によって結ばれたコミュニティにおいては、社会的不確実性が存在する中で、相手の人間性に対する信頼がもとになって維持されるため、外部からも参入可能な拓かれた関係となることを示し、これを「恋人型コミットメント」と呼ぶ。つまり、「安心」の関係により形成されたコミュニティでは、仲間内の同質性を根拠として結びついているため、関係がいまある以上に拓かれ、発展することはなく、一人ひとりの「違い」は排除の対象となりうるのである。

以上のことより、Nひろばでは、一人ひとりが「違い」を抱えながらも「ありのままの自分」で居ることが排除されずに保障されるということは、Nひろばが仲間内の同質性で結びついた「安心」の関係によって形成されたコミュニティではなく、社会的不確実性の存在する状況で、相手のありのままの人間性を評価することによって結ばれた「信頼」の関係によって形成されたコミュニティであると考えられる。そして、「信頼」の関係によって形成されたコミュニティにおいては、コミュニティに参加する全ての人々が「ありのままの自分」で居ることが保障されることで、多様な人々のかかわりの中で「ありのままの自分」は「その人らしさ」として生かされることとなり、その結果、Nひろばに集う全ての人々が支援する側・される側という立場を越えて、「ひろば」を創る一員として、互いが互いの育ちに影響を与える存在となりうる可能性が潜在していると考えられる。これが、Nひろばでは、誰が支援する側で、誰が支援される側なのか、明確な区別がつかないという現象が起こっている理由であり、支援する側・される側の境界線を越えて役割交替が頻繁に起こる理由であるといえる。

いま、地域社会でもノーマライゼーションの理念のもと、インクルージョンを実現することが目指されている。インクルージョンとは、「エクスクルージョン・排除」に対立する「インクルージョン・包含」という概念であり、障害のある人もない人も、社会的マイノリティーの人も、社会の中に「含まれている」のであり、同じ社会の中で、個々の違いが尊重された上で、共に生きることが正常な状態であるという考え方である。したがって、地域社会においても、全ての人々が排除されることなく、周囲の

人と共に生きること、自分らしく生きることが保障されなければならないといえる。

一方、Nひろばは「信頼」の関係によって形成されたコミュニティであることから、多世代・多様な人々が社会的な違いを抱えながら集い、その違いを排除することなく、「その人らしさ」として尊重し、生かすことで共に生きることを実現していた。さらに、共に生きるプロセスにおける多様な人々のかかわりの中で、Nひろばに集う全ての人々が支援する側・される側という立場を越えて、「ひろば」を創る一員として、互いが互いの育ちに影響を与える存在となっていた。

これよりNひろばは、インクルージョンを実現しているといえるのではないだろうか。まさに、「インクルーシブなひろば」が創造されたと考えられるのである。そして、「インクルーシブなひろば」において、そこに集う全ての人々が支援する・されるという各々の立場の境界線を越えて、役割を交替しながら互いの育ちを支える存在となっていることから、これは、子育て力の向上を実現する地域コミュニティづくりに資するものであるといえる。これより、地域における子育て力の向上を実現する地域コミュニティを形成するために、コミュニティに参加する人々の間に「安心」の関係ではなく、「信頼」の関係を構築することが重要であることが明らかとなった。

最後に、Nひろばに集う全ての人々の「違い」を「その人らしさ」として生かすために、常に「違い」を楽しむこと、「変化」を恐れないことを忘れずに、長い時間と多大なエネルギーを費やして対話を積み重ねているNひろばスタッフに敬意を表し、本論文の締めくくりとしたい。

## 注釈

注1：鯨岡（2009）は障害の「碍」の文字は「石が行く手を遮る」という意味であり、障害を表現する際、「害」の文字よりも適切であるという観点から「碍」の文字を用いており、著者もこれに倣い「碍」の文字を用いている。

## 引用文献

- ・鯨岡峻「障害児保育とは」鯨岡峻（編）『最新保育講座⑤障害児保育』2009年 ミネルヴァ書房. 1-44
- ・山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』1999年 中央公論新社

**付記**

本研究の一部を日本保育学会第 65 回大会においてポスター発表した。本研究は、科学研究費

2012 年度～2014 年度（基盤研究（C）課題番号：24616017）の助成を受けている。